

時間のドア

木村裕子

時間のドアをあけると
あのとこの秋風が
澄んだ足音を立てながら
山裾からおりてきた

風が運んできた手紙には
海の向こう、山の向こうで
いのちの炎を懸命に燃やす
青紅葉の姿があった

ゆらゆらゆれる紅葉よ
まだ散ってゆかないで
海山どうしたら
越えていけようか

すると、いつのまにか
紅葉は輝きはじめ
木々の間から
こうこうと燃える焔を滲ませていた

遠くて近い
時間の中で
ずっと

待っていてくれたのだ
灯りに手をのばす
そのままそっと
ここに置いて
一緒にドアの外にでた